

基調報告（要旨）

いま、なぜお題目なのか

長谷川 正 徳

（現代宗教研究所所長）

日蓮聖人の教説に従って御題目を唱え、法華経を信ずるわれわれが、今日の社会や国や世界に生起しているさまざまの問題や事柄をどのように考え、どのように対処していったらよいか、ということは、われわれの信仰の本質にかかわる最も大切なことである。

日蓮聖人の根本精神をどのように受けつぎ、そしてどのように現在及び未来に生かすかということこそ、われわれの第一義の課題であり、この課題を果すべく題目総弘通運動は、企画され、展開されているのである。

このことは、教師にとつても、信者にとつても全く同じなのであり、故に総弘通と称するのである。冥想の宗教といわれた仏教の通念を破つて、日蓮聖人の宗教は行動と変革の宗教であった。宗祖の宗教は、鎌倉時代の歴史的現実のなかから生まれ、現実を動かすエネルギーにみちた宗教であった。このエネルギーが凝つて日蓮教団を形成し、七〇〇年余の今日にいたっている。

七〇〇年余の歴史は重厚な伝統を作っている。ところで、歴史や伝統というものは、絶えず未来に向つて再創造されなければならない。創り出す働きを失った伝統は、もはや伝統ではなく、形骸に過ぎないのである。歴史や伝統が尊ばれるのは、それが常に現実を形成してゆく主体的エネルギーとして、いきいきとした具体的生命を持っている場

合のみなのである。

われわれは、宗祖の教えをいつも現在に生かすということ、宗祖の信仰と実践を自らの願いとして現在に生かすということ、宗祖の信仰と実践を自らの願いとして現在に生きるということ、総弘通運動の中核点はまさにここに在る。この中核点をおさえてお題目を唱えるものとなるとき、「なんのために、お題目を唱えるのか」「いま、なぜお題目なのか」の設問への解答は、おのずから出てくる。

この第十九回中央教化研究会議の開催趣旨の①に、「お題目総弘通運動二年目にあたり、運動の現状をふりかえりつつ、お題目の説き方唱え方を語りあい、現代社会に対応する運動の進め方について話合おう」とある。

この現代社会に対応する運動の最重要なもの一つに、世界立正平和運動がある。

第二次世界大戦後、人類は深い悔恨と強い誓約の思いをこめて、ユネスコ憲章の中で、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」とうたいあげた。殊に日本は、世界で唯一の被爆国として、戦争放棄を憲法で規定した。このことよって、日本人の間には、戦争を否定する決意がしみとおり、永久に非武装の立場を貫き通し、平和憲法の趣旨を全世界に訴えていくに違いないと、われわれはあたかもそれが自明であるかのように思った。

ところが現況はどうか。核大国の軍拡はエスカレートするばかりであり、その状況の中に、わが国の軍備も拡充の一途をたどり、戦後日本の悲願であったはずの戦争放棄・非武装の決意は、何ほども血肉化されていないことが、いよいよあらわになったのである。

核兵器は戦争の抑止力だなどという何の保証もない幻想論をよりどころにして、軍拡に狂奔する核大国に向って、はつきりものいえるのは、真の平和原理に立つわれわれ宗教者のみであろう。

戦争をたくらむ人びとは、必ずもつともらしい口実と理くつをつくり出すが、ここでははつきりいわねばならぬこと

は、「どのような理由があろうとも、よい戦争というものはないし、またどんな平和でも悪い平和というものはない」という先人の言葉である。

昨年(昭和六十年)九月一日付で管長教旨が出されたが、その中で、「因って宗門は、物心両面に亘る世界の情勢を深刻に危惧し、真俗二者に通ずる自家の積弊を卒直に反省し云云」とあり、総弘通運動は、この世界の情勢を深刻に危惧するところから発するものなることを知らねばならぬ。

われわれは、世界の危機的状況をしつかり認識し、「殺すなかれ」「殺さしむるなかれ」の仏の金言を自らの信念として、核戦争阻止・核兵器廃絶を当面緊急の課題として、お題目総弘通運動の社会的実践の中心にすえてゆかねばならないと考える。

生命絶対尊厳の立場より、人間の殺し合いである戦争を絶対に否定するわれわれは、同時に人間の世界にみられるさまざまな差別も、また生命の尊厳を損うものとしてこれを否定する。

われわれは、人間として生まれたかぎり、生きる権利、いのちをえらびとる権利とともに、人間らしく生活する権利・教育を受ける権利など、誰もが同じように持っている。憲法には、これを基本的人権とうたい、「侵すことのできない永久の権利」として、すべての国民にこれを保障している。ところが現実には、さまざまな差別現象があるが、中にも部落差別という大きな問題があつて、今日、同和問題という重要な国民的課題となつている。

今日、部落差別の撤廃が要求されるのは、それが被差別部落民の基本的人権を奪うものであるからであり、真の人權、自由の解放を求めるとして当然のことである。そして、その目的の達成は、すべての国民の人權の自由と平等と、そして平和が守られる真の民主的社会的の実現によつてもたらされるものであることはいふまでもない。

世界恒久平和の確立とは、地上における「仏国土の現成」であるのと同じく、真に差別のない民主的社会とは仏国土そのものなのである。

管長教旨の中に、「仏国土を建設せんと欲せば、真俗智愚、男女長幼となく、力に随つて法華經の一偈一句を演説し云云」とあるが、まことに、平和も同和もわれわれ法華經徒にとつては、いづれも仏国土現成に向つての祈りと精進の中から生まれるものである。

搾取なき社会の原理、自由を奪う特権者なき社会の原理、戦争を生むことのない永久平和の世界の原理、それらはずべて、天下万民一同に南無妙法蓮華經と唱え奉る仏国土現成の理念の中にのみあり得るのである。

人間は決して単に理性的、道德的存在ではない。故に、人間は自己自身の根源的な矛盾や限界というものを必ず自覚するにいたる。そして、それが契機となつて、人は、自己存在の根底に自己をつつむ久遠の本仏を知るものとなる。すべての人間が煩惱具足の狂子（寿量品）でありながら、それ故にこそ、かえつて深く久遠本仏の大慈につつまれて生きている兄弟同士であることを知らしめられる。

お題目総弘通運動とは、本仏大慈の「是好良業総服用運動」とも称し得よう。

戦いなき世界永久平和と、差別なき真の民主的社会的の実現をめざして、われわれの運動は展開されている。日蓮教徒の歴史的使命は重大であり、果さねばならぬ役割は実に重いのである。

教化事例発表（要旨）

テレフォン相談室の活動

外 山 寛 穂

（東京都円珠院住職）

日蓮宗東京東部電話相談室は、東部宗務所の公的組織として、約一カ年にわたる管内教師の実現にむけての熱意みなぎる努力の結実として、昭和六十年十月二十一日、東部管内江東教会の一室を借りて開設された。

開設資金は、管内寺院・教会・結社からの電話相談室設立勸募金を基幹とし、更に宗務所助成金をもってこれに当てた。

現在は、相談件数の急激な増加と、面接相談を希望する者もあるため、管内深川浄心寺の境内に相談室専用の独立家屋の提供を受けて活動中である。

相談電話は二台、相談日は、毎週月水金の午前十時から午後四時まで、管内教師五十名が電話相談員となり、開室日は二名が当番制で出向して電話相談を受けている。

開設以来、百本までは二十二日の相談日を要したが、二百本目は十二日間、三百本目は九日間で突破した。四月中旬に五百本目を記録し、七月末日までに八百本を超している。

相談件数を増す方策は、相談室の存在を知らしめる広報宣伝活動が最大の要素である。現在、「日蓮宗新聞」の広告以外は、東京を中心とする都市圏の範囲でこの数字であるから、宣伝の範囲の拡大は相談数の増加に連動すると考え

て良い。即ち、現在の家庭環境や社会状況からして、相談したい——悩みを聞いて欲しい——という人が潜在し、相談内容も実に広域であることが確認された。

今、我々は、この相談室を如何に効果的に永続させるか、相談者に答え得るか真剣に取り組んでいる。

電話相談五百人の統計 —— 核家族化の世相に親身の応答 ——

すでに電話相談も七百本を超えた。最近は人生相談も増え、相談員の親身の応答も好評である。内容的には、都会型、核家族型ともいえるものが多く、孤独・不信の悩みも少なくない。

今回は、相談者五百人の統計グラフを中心に報告する。

表A— 仏事一般と人生相談で全体の七割を占め、相談員もベルがなると、まず、仏事かなと思うほど。

表B— 仏事関係（日蓮宗、仏事一般、信仰相談、各種相談）の相談の多いのは、布施。年忌法要・開眼・棚経などのお布施の額の相談が圧倒的。ベスト十五を表にしたが、このところ新興宗教のことわり方や、古い位牌の処理などの相談も増えている。

表C— 世代別にみると、まず男女比はピタリ一対四。三十〜五十代が多い。しかし、十五歳の中学生など十代の相談者も十七名あり、しっかりした指標をあたえるよう応答に努力している。

表D— 世代別相談者中、仏事相談と人生相談を比較してみると、年代がはっきりしている。仏事は五十代を頂点に、人生は三十代をトップに、ピラミッドができあがる。特に顕著なのは十〜二十代で、二対四十一が示すように、若い人の人生相談が目立つ。

表E— 対話時間も、仏事と人生では比較しやすい。まず、仏事相談は五〜十分で終る（二等辺三角形）。人生相談は二十〜三十分が多く（正三角形）、長いものは一時間を超えるなど相談者も、かなり疲れるようだ。

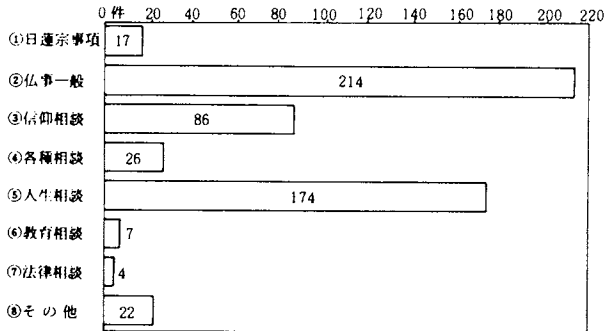
【内容】 日常的な仏事相談から、こころの不安、夫婦の悩みなど、相談は多岐にわたっている。

仏事関係では、「お布施ほどのくらい」が最も多い。その他では、「袋の表書は何と書くのか」、「お墓に戒名を彫つてもよいか」、「仏壇のまつり方は」、「当家意外の位牌を置いてもよいか」、「古い位牌はどうするの」、「信行会に参加したいが」、「お経は何を読んだらよいか」、「水子の供養はどうしたらよいか」、「不思議な夢ばかりみて眠れない」、「新興宗教の入信をすすめられ困っている」、「さわり・あたりがあるといわれた」等。

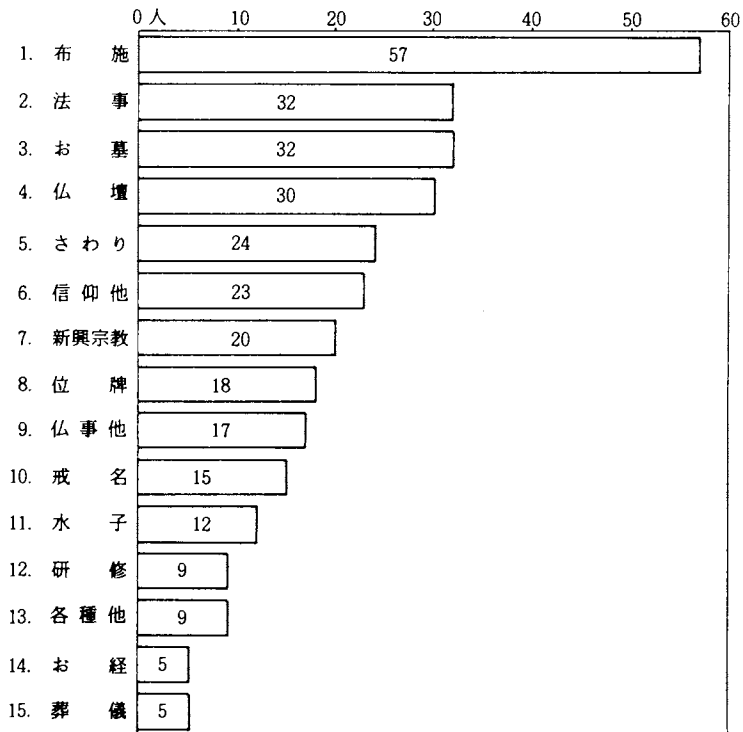
人生相談などでは、夫婦関係、精神不安、家庭問題が多く、特に浮気などの異性問題が目につく。「夫が浮気して毎夜帰りが遅い」、「夫の遊びに我慢できず離婚したい」、「会社の上司と不倫の関係になってしまったが」、「夫と性生活がうまくいかない」など、相談員も頭をかかえてしまう相談や、「不眠症をなおしてほしい」、「ノイローゼで困っている」など心の病いを訴える相談も多い。

表A一相談事項別相談件数

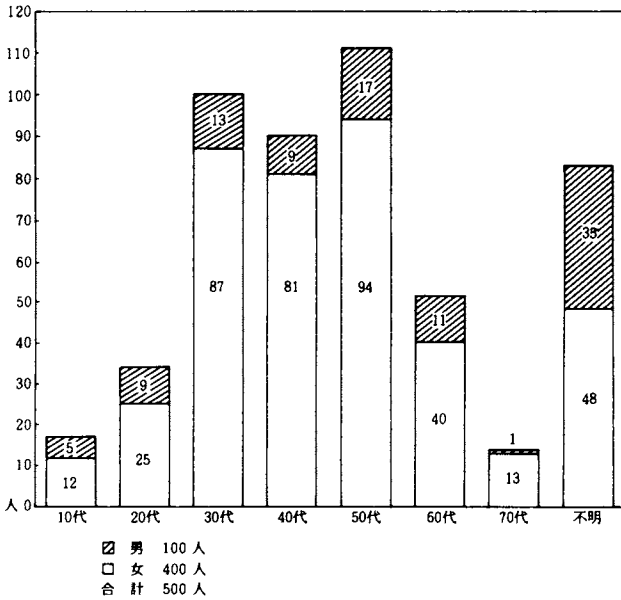
相談者 500人
相談件数 550件



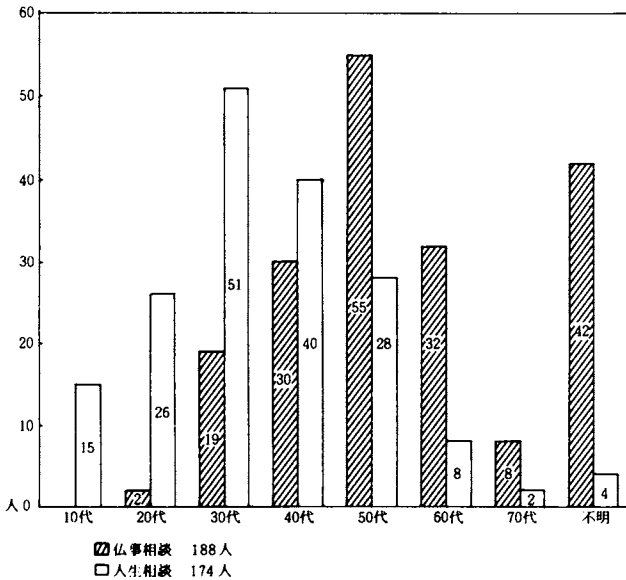
表B一仏事関係相談件数ベスト15



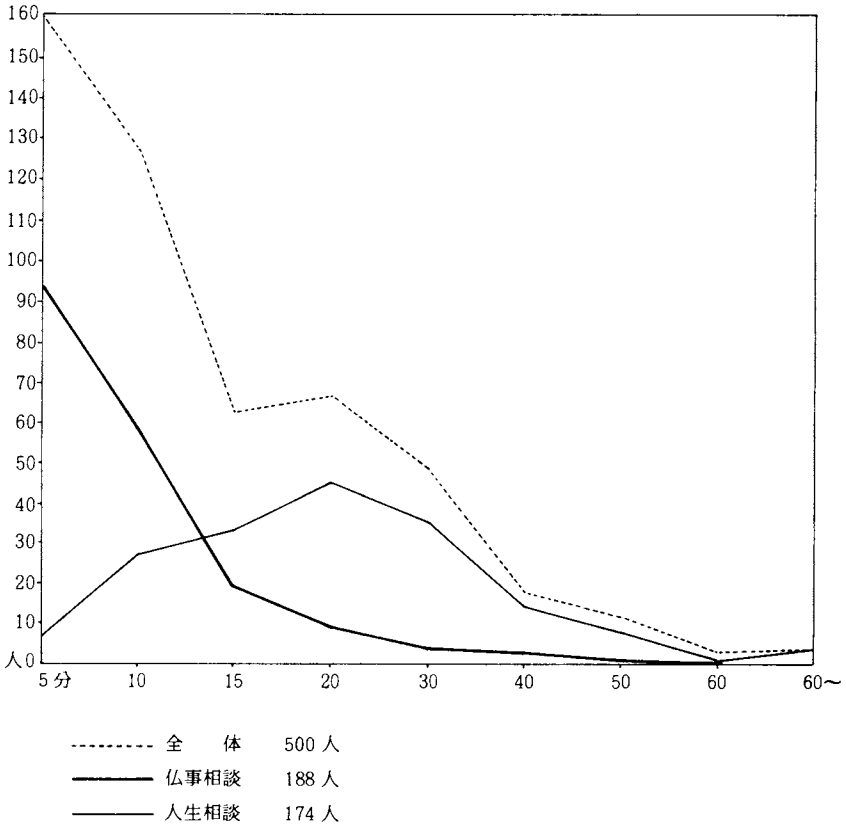
表C—世代別相談者数



表D—世代別の仏事・人生の比較



表E—対話時間別相談者数と仏事・人生の比較



いじめ・非行問題とお題目総弘通

太田 鳳苑

(愛知県妙延寺住職)

物質的な豊かさの中で、他人への思いやり、弱者へのいたわりなど、心の大切さを見失いがちな社会的風潮である今日、宗門として、「いじめ・非行問題を取りあげ、お題目総弘通運動」と関係させようとしたところが興味深いと思う。

環境の変化

地域社会における連帯感の欠如など、社会環境の急激な変化、家庭における親の養育態度と学歴偏重の風潮、加えてテレビ・雑誌等のマスコミ関係や、青少年を取り巻く有害環境の及ぼす影響など、複雑な要因が絡み合っているとされる。「いじめ・非行問題」は、少年自身に大きな影響を及ぼす深刻な問題であることは勿論のこと、その原因も根深いものであるということを知らなければならぬ。

思いやり・心の痛みの分かる人づくり

いじめ問題について言うならば、その大部分が水面下の現象であるために、周囲のものが良心的に配慮していても、なかなか眼のとどかないところが多く、その取り組みは真にむつかしく、そこで家庭・学校・地域社会の密接な連携に立った体制づくりが強要されると言うものである。

特にいじめられている児童生徒に対しては、十分に悩みを聞き出す指導をしながら、同時に不安を取り除く指導をしなければならぬ。

いじめは、それが解消するまで心を育て、自ら深く反省させるための指導を忘れてはならない。なぜならば、直接の当事者の心理的社会的などの背景にかかわる内面的なことがらであるからである。

陰湿化した「いじめ」

最近のいじめは、昔のいじめとは質的に違っているということを知らなければならぬ。

昔のいじめは、多くの場合、動機や態度も単純であり、限界を心得ていたのに対して、最近では、執ようで陰湿化し、不特定多数の者が集団的に特定少数の者を長期的にいじめたり、欲求不満を解消する手段として、いじめが行われているということである。

検討と対策について

文部省をはじめ教育関係機関では、いじめ問題が極めて深刻な状況にあることに心して実態調査・事例研究などを行い、緊急対策をする一方、長期的、総合的観点を含む対応を検討しなければならないと、昨年十二月十日、十一日、文部省主催による「いじめの問題に関する生徒指導推進会議」が開かれたのである。「いじめ」は人間関係から派生し、教師の指導のあり方、家庭のしつけ問題が深くかかわっているということを認識し、以来、教育関係諸機関では、心を育てる方策を研究しながら、心にくい込む指導を工夫、実施しているのである。

敬愛心と相互信頼

人間生活を営んでいる我々は、お互いに相手を尊重し合うという基本的な心を育てることが大切であるということ、は言うまでもないことであるが、積極的に児童生徒の中に入れていくことによつて、交友関係や一人ひとりの生活態度の変化をつかむことも、また大切なことである。このようにして自主的、実践的活動を通して、相互作用を深めながら、仲間意識を高めたり、助け合い協力し合つたりすることの大切さを味わわせることが重要であるということ、を教えることである。

基本的な生活習慣

かつては、近隣の子供が一緒に遊び、その中から年下の者が年上の者の行動を見習うことによって社会性を身につけたり、年上の者が年下の者をいたわり、気持ちをくみ取ったりする機会が多かったが、現在では極めて少なくなつたことも考えものである。そんなことを思う時、親は子供に対して幼児期から人間として備えるべき基本的な生活習慣をしっかりと身につけさせ、他人を思いやる心や正義の心というものを日常生活の中で養っていくことが極めて重要になってくるものである。

生活の中にお題目を

「法華を識る者は世法を得べきか、一念三千を識らざる者には、仏大慈悲を起し、妙法五字のうちに此珠をつつみ、末代幼稚の頸にかけさしめ給う」(観心本尊抄)の聖訓は、正に現代、我々宗徒をして取るべき姿勢であり、世間に対して行動を起す時であると思う。「只、妙法蓮華經の七字五字を日本国の一切衆生の口に入れんと励むばかり也、これ即ち母の赤子の口に乳を入れんと励む慈悲也」(諫曉八幡抄)の自覚に立って、教師一人ひとりが大衆に接したならば、必ずや衆目は宗門に向けられることと思う。

宗門の閉鎖性について考える

法縁という大義名分に名をかりた宗門の閉鎖性に加えて、昨今の寺門後継者不足は殊に深刻となり、そうした中で布教活動は身に入らず、寺門護持にのみ終始するのが現状である。私は以前よりこうした時の来ることを予期しながら、宗門内局に対して人材養成と後継者特選制度の導入を考えてほしいと進言したものであるが、今日なお後者については答申を得ていない。こうしたことから、宗門の閉鎖性を見直して伝道宗門としての大勢づくりを成しとげてほしいと思う。

今後の課題として

宗門は、これら宗祖のお言葉を旨として、信徒の指導に実際に役立つ各種のカリキュラムを見直し、教師としての資質向上をめざし、確実に養成することが必要である。